資料 7a

南アルプスジオパーク（再審査）

現地調査報告　菊地俊夫　柴田伊廣

主な対応者（敬称略）

白鳥孝（南アルプスジオパーク協議会会長・伊那市長）、福島貞康（会員・大鹿村長）、中山晶計（会員・長谷総合支所長）、小松千里（ジオパークガイド）北原滋夫（ジオパークガイド）、穴澤辰幸（ジオパークガイド）、北村健治（南アルプスジオパーク学術顧問）、伊藤佐登子（ジオパークガイド・観光協会）、平瀬長安（大鹿村観光協会）、森菊枝（ジオパークガイド）、宮嶋秀志（上村自治振興センター）、伊藤卓郎（南アルプス林道バス）、伊藤千尋（南アルプス林道バス）、原文宏（南アルプスジオパーク学術顧問）、松崎順平（国立信州高遠青少年自然の家）、北原勉（国立信州高遠青少年自然の家）、酒井憲一（国立信州高遠青少年自然の家）、山崎大行（国立信州高遠青少年自然の家）、田中博文（伊那市生涯学習課長）、坂本正夫（飯田市美術博物館・南アルプスジオパーク学術顧問）、河本和朗（大鹿村中央構造線博物館・南アルプスジオパーク学術顧問）、北澤夏樹（伊那市教諭・南アルプスジオパーク学術顧問）、捧剛太（伊那市創造館）、濱慎一（伊那市創造館）、平賀研也（伊那図書館）、石城正志（高遠高校）、杉山敦（高遠高校）、吉田浩之（南アルプスジオパーク事務局）、三澤豊（南アルプスジオパーク事務局）、小池温（南アルプスジオパーク事務局）、久保田誠（飯田市・ジオパーク担当）、平沢正邦（飯田市南アジオパーク担当）、五味健一（富士見町・ジオパーク担当）、北村亨一（富士見町・ジオパーク担当）

視察地

伊那市役所、中央構造線溝口露頭、伊那市長谷公民館、国立信州高遠青少年自然の家など

現地審査まとめ

長野県伊那市（一部）、大鹿村、飯田市（一部）、富士見町（一部）を含む。東西 40～60km、南北 100km でそのほとんどが山岳地帯。南アルプスジオパーク（中央構造線エリア）は、この南アルプス西部の中央構造線にそって広がる南北に細長い地域を範囲としている。テーマは、「海川山のダイナミズム」としており、大地の変動と人々の暮らしの関係が良くわかり、人がなぜ山岳にすむのかが良くわかるジオパークである。①付加体の発達過程 ②隆起量が日本一の南アルプスの山岳地帯 ③中央構造線の発達過程の３つが主たる地質遺産である。人々の暮らしと地質との関わりも非常に良く研究されていて、書籍やパンフレット、拠点施設で地形や地質の成り立ちとともに紹介されている。教育においては、ジオパークを素材とした自然体験プログラムが、国立信州高遠青少年自然の家や学校教育・図書館において長年に渡って実施されている。学校教育においても、県外のジオパークのある高校とジオパークのネットワークを活用しながら、連携する動きがある。

中央構造線の解説をするガイド

しかしながら南アルプスジオパーク内での組織内の連携不足がある。自治体を超えた同じ分野の横の繋がりに乏しく、一つの団体で作られたプログラムや課題や役割分担の共有が不十分である。また、交通拠点での案内・拠点施設での展示・ジオサイト看板など訪問者がジオパークの情報を得る仕組み（数も質も伴に）が不十分である。

とはいえ、上記の欠点を克服する具体的な動きも芽生えつつある。例えば、ジオパークの運営母体の改善が見られ、今後さらに自治体を超えた運営が可能となる可能性がある。また、再審査に向けて全ての自治体のジオパーク関係者を集めて、今後の計画を策定する動きがある。看板や拠点施設における表示の改善案も作成中である。

１）ジオサイトと保全

自然公園法（南アルプス国立公園）や文化財保護法（国や県や市町村の天然記念物）によって地質

遺産の保全がなされている。

２）教育・研究活動

国立信州高遠青少年自然の家では、都市部（東京都新宿区）との姉妹都市関係を活かし、ジオパークを対象とした自然体験プログラムを実施している。また、戸田の化石保存会など長年に渡って岩石や化石を対象とした自然体験学習を実施しており、これらによって地質学の研究者を目指す大学生を育成してきた実績がある。日本ジオパークネットワークを活かし、県外のジオパークのある高校との連携も進みつつある。しかしながら、各団体や学校で実施されているプログラムが南アルプスジオパーク全体で十分に共有されているとは言い難い。

教育活動について説明するスタッフ

３）管理組織・運営体制

運営母体が世界遺産を推進する団体の一部であったのが、独立する団体となったことは、運営や管理の効率が向上すると考えられる。再審査のためとはいえ、ジオパーク関係者が集まって課題と目標を共有する動きがあることは評価できる。しかしながら、運営組織に行政関係者が多く、地域の観光や商業に関わる人材および最新の科学研究に関わる人材が不足している。また、博物館の学芸員が運営組織に含まれるが、南アルプスジオパークの広さやテーマの多様性を鑑みると、ジオパークと研究者や地域住民をつなぐパイプ役となりうる常駐の専門家の配置が望ましい。

４）地域の持続可能な発展とジオツーリズム

伊那市の図書館と高遠高校が軸となり、地域住民や大学生を巻き込みながら、商品開発やスマートフォンを利用したツーリズムの構築（ジオパークぶらり）がなされていることは評価できる。しかしながら、ホームページやパンフレットに記載されている拠点には、ジオパークのパンフレットが設置されているのみで、ジオパークの分かりやすい展示やジオパークを巡るヒントとなる展示はほとんど無い。観光客が初めて出会う人（観光案内所や博物館の受付）に、ジオパークの知識や案内できるスキルが乏しく、地質や地形の学芸員に会えないとジオパークの情報を得ることが出来ない。初めてジオパークを訪れた人の移動経路や興味を想定した展示や看板の設置および人材育成が急務である。また、世界ジオパークを目指すのであれば、看板やパンフレットの二カ国語対応が望ましい。

ジオパークにおけるガイドは、実際に現場を案内できる人が自然の家や博物館などの教育関係に偏りが見えるものの、熱心な方が活動を続けている。また、南アルプス林道でのバスツアーでの案内も長年続けられており、登山客へのジオパークの情報提供として評価できる。また、施設内でのガイドは自身の生活体験も交えながら説明されているため評価できる。しかしながら、これらのガイドをどのようにして受けられるかが不明瞭である。拠点施設の展示がジオパークに対応していないので、案内が無ければジオパークを意識することができない。また、野外でのガイドは難解で、一層の分かり易い説明のスキルを磨くなど工夫が必要である。

５）国際対応およびネットワーク活動

まだ、分野が限られるようであるが、伊豆半島ジオパークや箱根ジオパークとの連携が進みつつあるようだ。今後、さらに先行するジオパークとより強いネットワークを維持するための活動を推進することが望ましい。

６）防災・安全

崖崩れや断層運動のメカニズムの理解などをジオパークの素材として活用していることは評価される点である。今後、山岳での防災・安全マップとジオパークのパンフレットを組み合わせたような地図を作成し、登山客にもジオパークを楽しんでもらえる工夫が必要であろう。

以上で指摘した点や現地審査で指摘された問題点を含め、今後どのように改善するか、人や予算の裏付けとスケジュールを明記したアクションプランの形で、日本ジオパーク委員会に報告してほしい。また、ガイド養成講座の詳細なカリキュラムと認定制度に関する資料も合わせて提出してほしい。